

# 日本語における漢語副詞の語尾問題について

梁 継国 王 信

中国語と比較して分かるが、日本語は粘着語系の言語であり、動詞、助動詞、形容詞、形容動詞などに語尾変化があることはその印になる。中国語はもちろんそのような機能はないわけである。しかし、日本語でも、上記品詞以外に語尾変化のあるものはまだ見当たらない。その意味で、表題に問題にしている日本語の漢語副詞の語尾問題は日本語の漢語副詞につく「に」、「と」などのようなものを指し、ここで仮に漢語副詞の語尾という言い方にしたい。本稿では漢語副詞の語尾としての「に」、「と」などはどのような使い分けがあるのか、その語尾「に」、「と」などの違いにより漢語副詞の文中における表現上どのような性格を与えるかを調べ、それを明らかにすると同時に、日本語履修者にそのような漢語副詞の習得に少しでも寄与したい。

## 一 日本語の漢語副詞の語尾形態

「現行辞書における副詞一覧」には古代漢語から日本語に受容された漢語副詞はおよそ278語収められている。そのうちに裸で使われるものは180語あり、古代漢語に「に、と」などのような語尾がついて一語となって漢語副詞として使われるものは大体80語ある。それらの漢語副詞を語尾別に分類すると、次のようなものになる。

### 1 語尾「に」がつくもの

暗に	一概に	一時に	一度に	一気に	一緒に
一斉に	一体に	一に	陰に	有無に	気根に
急に	仰に	現に	巖に	直 <small>じか</small> に	直 <small>じき</small> に
次第次第に	次第に	実に	順に	真に	切 <small>せつ</small> に
絶対に	切 <small>せち</small> に	是非に	相応に	俗に	単に
特に	頓 <small>とん</small> に	頓 <small>とん</small> に	頓 <small>とん</small> に	如実に	馬鹿に
万一に	非常に	必死に	不意に	変に	本・真に
妙に	無下に	無性に	無理に	面々に	猛に
朦朧に	優に	楽に	陸・碌に		

### 2 語尾「と」がつくもの

因果と 颯と ザッと 時節と 自分と 打・丁と 篤と

とつくと 茫と 万と 役と 凜と 麗麗と 歴と

### 3 その他の語尾（で、ながら、から、ぞ、も、とも、の、は、きり）がつくもの

結局で 道理で 自分ながら 卒爾ながら 心から 天から  
 真・神ぞ 天道ぞ 毫も 微塵も 是非とも 例の  
 実は テンきり

そのような状況を整理して、表1を作成してみた。

表1

語尾による分類	数 量	比 率%
語尾「に」がつくもの	52	65%
語尾「と」がつくもの	14	17.5%
他の語尾がつくもの	14	17.5%
合計	80	100%

以上の語のうちに「直」（じか、じき）、「切」（せつ、せち）「頓」（とに、とみ、とん）のように、二通り、三通りの読み方がある。日本語では読み方によりそれぞれ二語と三語としているが、中国語では何れも一語としているので、本稿でも一語として計上した。また「ザっと」、「とつくと」、「テンきり」のような漢字表記の確認の出来ないものが3語あり、それはもともとどういう漢語かは確認できないから、本調査の対象から除外した。それで以上の漢語副詞のうちに、古代漢語から受け入れられたものと思われるのは73語となる。

## 二 語尾の付く漢語副詞の語源及びその用例

漢語副詞は本来漢文においてどういう品詞であるかは漢文副詞研究に欠かせない問題の一つだとされている。しかし、漢語の品詞分類に難しいのは一語に多くの用法と意味があり、それを分け切れない語が多く存在するところにある。本稿では主として「漢語大辞典」「辞海」からその日本語の漢語副詞に当たるようなものを取り出して次のように分類した。

### 1 古代漢語の副詞、介詞 から来たもの

一概（に） 一気（に） 一斉（に） 一時（に） 現（に）  
 毫（も） 直（に） 実（に） 実（は） 順（に）  
 真（に） 真・神（ぞ） 切（に） 卒爾（ながら） 絶対（に）  
 相応（に） 単（に） 篤（と） 特（に） 頓（に）  
 如実（に） 万一（に） 不意（に） 本・真（に） 面々（に）

猛（に） 非常（に）

2 古代漢語の名詞から来たもの

気根（に）	是非（に）	無性（に）	因果（と）	時節（と）
次第（に）	次第次第（に）	自分（と）	自分（ながら）	役（と）
歴（と）	結局（で）	道理（で）	心（から）	天（から）
天道（ぞ）	微塵（も）	是非（とも）	馬鹿（に）	例（の）

3 古代漢語の数量詞から来たもの

一緒（に） 一体（に） 一（に） 一度（に） 万（と）

4 古代漢語の形容詞から来たもの

暗（に） 陰（に） 急（に） 蔽（に） 俗（に）  
 妙（に） 優（に）

5 古代漢語の動詞から来たもの

仰（に） 変（に） 楽（に）

6 古代漢語の擬声語と擬態語からきたもの

打・丁（と） 颯（と） 茫（と） 朦朧（に） 凜（と）  
 麗麗（と） 陸・碌（に）

7 古代漢語のフレーズから来たもの

有無（に） 必死（に） 無理（に） 無下（に）

以上の分類状況を整理して、表2を作成した。

表2

漢語副詞の語源	語 数	比 率%
古代漢語の副詞、介詞から来たもの	27	37%
古代漢語の名詞から来たもの	20	27.5%
古代漢語の擬声語、擬態語から来たもの	7	9.6%
古代漢語の形容詞から来たもの	7	9.6%
古代漢語の数量詞から来たもの	5	6.8%
古代漢語のフレーズから来たもの	4	5.5%
古代漢語の動詞から来たもの	3	4%
合計	73	100%

表2を見て分かるように、漢語副詞には古代漢語の副詞、介詞から来たものが一番多く、27語ある。その次名詞は20語、擬態語、擬声語は7語、形容詞は7語、数量詞は5語、漢語フレーズは4語、動詞は3語の順である。それらの語の古代漢語における使用状況を整理するため、次のように用例調査をした。その上、日本語と対照しながら、その関係をも分析して見た。

### 1 古代漢語副詞、介詞としての用例

六年九月、河決於滑州、一概東流、居民登丘塚、為水所隔。(新校本旧五代史・第1883段)

你若去時、千萬要把那本金剛經自己帶在身上、方可前進、切莫忘記了！(醒世姻緣・第43段)

眾僧都道：「全是老爺貴府平昔好善、所以感動了世尊、挈帶小僧們也得瞻仰一番、實乃三生有幸。」(三遂平妖伝・第122段)

一個跪下稟道：「家主晁相公聞知老爺寒天查夜、心甚不安、特備了一杯煖酒、伺候老爺禦寒；這就是家主的門首、晁相公自己在道旁等候哩！」(醒世姻緣・第188段)

以上の例文を見て分かるように、下線を引いている例の「一概」、例の「切」と例の「實」は古代漢語では副詞であり、漢語の副詞は日本語に受容されてからも品詞及び意味上ともに変わらず、日本語の漢語副詞として用いられている。例の文では「特」は品詞上では変わらないが、「わざわざ」という意味で副詞として用いられている。日本語だと「特に」と訓まれ、副詞として使われる。

### 2 古代漢語名詞としての用例

只是如今林子裏躺著一個、家裏躺著一個、不是個道理、也該作速計較。(三遂平妖伝・第97段)

正義賢音茂。舛音昌轉反。言世之迷惑淺識之人、或定彼從此、本更相貿易、真偽雜亂、不能辯其是非。(新校本史記・第4段)

夫三才分位、室家之道克隆；二族交歡、貞烈之風斯著。振高情而獨秀、魯冊於是飛華；挺峻節而孤標、周篇於焉騰茂。徽烈兼劭、柔順無愆、隔代相望、諒非一緒。(新校本晋書・第2507段)

上の例の「道理」は古代漢語では名詞であるが、しかし、日本語に受容されてから漢語名詞として用いられると同時に、漢語副詞としても用いられている。例の「是非」と例の「一緒」は古代漢語では名詞であるが、日本語では主に漢語副詞として用いられている。

### 3 古代漢語数量詞としての用例

雲翼言：「天地人通為一體、今人一支受病則四體為之不寧、豈可專治受病之處而置其餘哉。」  
(新校本金史・第2425段)

設官不給俸、隸禮部。二十四年清理釋、道二教、限僧三年一度給牒。(新校本明史・第1818段)

例の「一體」と例の「一度」は数量詞として物の数や動作行為の回数を表している。しかし数量詞は古代漢語でもよく副詞として用いられる点で、日本語と共通している。

### 4 古代漢語形容詞としての用例

良曰：「甚急。今者項莊拔劍舞、其意常在沛公也。」(新校本史記三家注・第312段)

朱能道：「不消相公費心、朱能自有妙策。來朝容稟！」(三遂平妖伝・第146段)

若揀一個有才有行、這便不可兼得了！又有那才行俱優、卻又在那禮貌上不肯苟簡、未免有恐怕相處不來。(醒世姻縁・第216段)

例の「急」、例の「妙」と例の「優」は古代漢語では形容詞である。しかし、形容詞はよく副詞として動詞を修飾し、物事の性質状態を表しているため、形容詞と副詞との境界線ははっきりしないので、日本語に入って副詞として用いられているだろうかと考えられる。

### 5 古代漢語動詞としての用例

應劭云：「秦穆公與臣飲酒酣、公曰『生共此樂、死共此哀』。(新校本史記三家注・第195段)

於是越乃引一人斬之、設壇祭、乃令徒屬。徒屬皆大驚、畏越、莫敢仰視。(新校本史記三家注・第2591段)

帝曰：「賊之所長者水也、今攻其城、以觀其變。若用其所長、棄城奔走、此為廟勝也。若敢固守、湖水冬淺、船不得行、勢必棄水相救、由其所短、亦吾利也。」(新校本晉書・第15段)

上の例の「樂」、の「仰」との「變」は古代漢語では動詞であるが、しかし、日本語では副詞として使われている。それは単なる品詞の変化だけではなく、意味も古代漢語とかなり相違しているのである。その意味上の相違については後に分析することにした。

### 6 古代漢語その他の品詞の用例

然長兒汝佞病革時。其女為焚一紙馬。汝佞絕而復蘇曰。吾魂出門。茫茫然不知所向。遇老僕王連陞牽一馬來。送我歸。恨其足跛。頗顛簸不適。焚馬之。(閱微草堂筆記・第3282段)

須臾鼓打三更、只聽得颯颯風響、自遠至近、漸到廟來、只見前面排列著許多儀仗、又有許多

火把紗燈；（醒世姻緣・第770段）

乃謂梁王曰：「周王病若死、則犯必死矣。[三] 犯請以九鼎自入於王、王受九鼎而圖犯。」（新校本史記三家注・第166段）

周相公見那班人越扶越醉、說道：「你這班人也甚是無理、他若果然詐了你的銀子、他做官時候你如何不在兩院手裏告他？」（醒世姻緣・第1209段）

例の「茫茫」は古代漢語では擬態語で、例の「颯颯」は擬声語であり、両方とも疊語という形である状態を表している。擬態語と擬声語は本来副詞の一種で、日本語に受容されても、副詞として使われている。しかし、例の「必死」は古代漢語では副詞の「必ず」と動詞の「死ぬ」との二語になっている。例の「無理」も形容詞の「ない」と名詞の「理」との二語になっているが、日本語ではそれぞれ一語となって副詞として用いられている。

そのように日本語の漢語副詞は古代漢語の副詞だけではなく、名詞、動詞、形容詞などさまざまな品詞からなっていることが分かる。しかしこれらの語は日本語に受容されて、意味上ではどう対応しているかは、非常に難しく、面白い問題で、後に検討したい。

### 三、古代漢語における原語義との異同

日本語の漢語副詞は中国の古代漢語にある副詞だけではなく、他の品詞を源にしたものもたくさんあることは、すでに記述したとおりである。意味上から観察して相当な相違があることも分かる。その意味上の相違については、『広辞苑』、『大辞林』、『大漢和辞典』、『漢語大辞典』、『辞海』などを調べてみた。それをおおまかに分類して整理し、表3を作成した。

表3

古代漢語との意味の異同	語数	比率%
同じ意味に用いられるもの	51	70%
違う意味に用いられるもの	22	30%
合計	73	100%

表3の語を具体的に示せば、次のようなものである。

#### 1 漢語副詞が古代漢語と同じ意味に使われるもの

暗に	一概に	一時に	一度に	一気に	一齐に
一に	陰に	有無に	急に	現に	巖に
直に	次第に	実に	順に	真に	切に
絶対に	相応に	俗に	単に	特に	頓に
如実に	万一に	非常に	不意に	本・真に	妙に

面々に	猛に	朦朧に	颯と	時節と	自分と
篤と	茫と	万と	凜と	麗麗と	歴と
道理で	自分ながら	卒爾ながら	心から	真・神ぞ	毫も
微塵も	例の	実は			

以上のような漢語副詞は意味上古代漢語のそれとほとんど変わりなく使われているのである。それを証明するため、古代漢語と日本語の用例を調べ、対照してみることにした。すべての用例を全部網羅すべきではあるが、紙幅の関係で、一部代表的なものだけ選び出してみることにする。

### 1) 一概に

世宗久乃知之、謂宰相曰：「若一概追還、必生怨望。若因循不問、則爵賞濫矣。(新校本金史・第1547)

- ②① 夫事有首從、情有輕重、若一概處死、恐非陛下含弘之義、又失國家惟新之典。(新校本旧唐書・第3345段)
- ②② それを考えると、この身は悲しい。この身は悲しい。この身は涙が出て涙が出て……』『ようわかつた……。しかし、さう一概に男のことをきめて言ふのはわりい。それはあの大納言どののやつてみられることは尊い。それはわらいと言はぬ。(道綱の母・田山花袋)
- ②③ かようにいろいろな方法を用いてのぼせを下げる工夫は大分發明されたが、まだのぼせを引き起す良方が案出されないのは残念である。一概に考えるとのぼせは損あって益なき現象であるが、そうばかり速断してならん場合がある。(吾輩は猫である・夏目漱石)

上の例 ②①の「一概」は漢文では「全部」「一律に」の意味で、例②②③の漢語副詞の「一概に」は「すべて」「まったく」という意味である。両者は意味上では殆ど同じように使われるが、用法上では漢語副詞の「一概に」は主に否定文末に使われるのに対し、古代漢語の「一概」は否定文と肯定文にも変わらずに使える点では相違がある。

### 2) 不意に

- ②④ 明年、天子始出巡郡國。東度河、河東守不意行至、不辯、自殺。(新校本漢書・第1172段)
- ②⑤ 岑不意漢軍卒至、登山望之、大震恐。宮因從擊、大破之。(新校本後漢書・第693段)
- ②⑥ 「あら何を証拠にそんな事をおっしゃるの。随分輕蔑なさるのね」と細君は中途から不意に迷亭に切り付ける。(我輩は猫である・夏目漱石)
- ②⑦ 「他人(ひと)の事なぞ考えていられやしない」しばらくすると葉子は捨てばちにこんな事を思った。そして急にはずんだ調子になって、  
「わたしあすアメリカに発(た)ちますの、ひとりで」  
と突拍子(とっぴょうし)もなくいった。あまりの不意に細君は目を見張って顔をあげた。(或る女・有島武郎)

例②④⑤の「不意」は漢文では副詞として、突然、思いがけないという意味であり、ほぼ例②⑥⑦の日本語の漢語副詞の「不意に」の意味用法と一致している。

### 3) 卒爾

②⑧ 「郭奉孝年不滿四十、相與周旋十一年、阻險艱難、皆共罹之。又以其通達、見世事無所凝滯、欲以後事屬之、何意卒爾失之、悲痛傷心。今表增其子滿千戶、然何益亡者、追念之感深。(新校本三国志・第436段)

②⑨ 依准、判官藤原貞敏卒爾下痢、諸船於此館前停宿。兩僧下船看問病者、登時歸船。(入唐求法巡礼行記・第8段)

③⑩ 2003年11月 卒爾ながら、私は普段個人(という単位)で仕事をしている。

([http://www.aquent.co.jp/jobmagazine/webColumns/grip/grip\\_1.html-6k](http://www.aquent.co.jp/jobmagazine/webColumns/grip/grip_1.html-6k) による。2005年9月15日取得)

③⑪ 随分ご無沙汰致してをりますが、相変わらずご壮健のご様子で何よりでございます。さて、卒爾ながらお尋ね申し上げます。まず従軍慰安婦の強制連行について論議を深めていきましょう。...

([http://ez.st37.arena.ne.jp/cgi-bin/danwa/kiji\\_display.cgi?thread\\_id=200412-001&kiji\\_id=00180-4k](http://ez.st37.arena.ne.jp/cgi-bin/danwa/kiji_display.cgi?thread_id=200412-001&kiji_id=00180-4k)による。2005年9月15日取得)

例②⑧⑨の「卒爾」の漢文用例は副詞として、俄かに、突然の意味を表している。例③⑩⑪の日本語の漢語副詞の「卒爾ながら」は現代語ではあまり使わないが、古風な言い方として、「突然失礼ですが」という意味に使われ、基本的に古代漢語の意味用法と一致している。

### 4) 實

③⑫ 董薛二人道：「我們家中各有老小、比先生不得。知州知道、我兩家實難分解。」(三遂平妖伝・第255段)

③⑬ 但聞其名、實未會面。(三遂平妖伝・第185段)

③⑭ 「僕は今夜はもうお暇(いとま)をします」純一は激した心を声にあらわすまいと努めてこう云って、用ありげに時計を出して見ながら座を起った。実は時計の鍼(はり)はどこにあるか、目にも留まらず意識にも上(のぼ)らなかったのである。(青年・森鷗外)

③⑮ 先生――

実は御相談に上りたいと存じましたが、余り急でしたものでしたから、独断で実行致しました。(蒲団・田山花袋)

上の例③⑫⑬の「實」は漢語副詞で、「確かに、本当に」の意味を表しているが、日本語においても、例③⑭⑮の「実に」は意味、用法にそれほどの相違がないようである。

## 5) 急

- ③⑥ 王安五年、秦攻韓、韓急、使韓非使秦、秦留非、因殺之。(新校本史記三家注・第1878段)
- ③⑦ 行未至、奮揚使人先告太子：「太子急去、不然將誅。」太子建亡奔宋。(新校本史記三家注・第2173段)
- ③⑧ 芳子が出て行った後、時雄は急に険しい難かしい顔に成った。(蒲団・田山花袋)
- ③⑨ すると、気も取りもどされて来た。仕残してあった仕事に急に手をつけだした。そして二人ともなとなしに、東京のはなやかな夜や、情を含んだはでな女の言葉を懐しく思い出した。(帰途・水野葉舟)

例③⑥の「急」は漢語形容詞で、焦るという意味であるが、例③⑦のそれが漢語形容詞の副詞的な用法で、「急いで」という意味になっている。しかし、例③⑧③⑨の「急に」は漢語副詞として変化が速いことを表し、古代漢語用例と若干ずれはあるものの、古代漢語の意味を伸ばしたとも見られる。

## 6) 非常

- ④⑩ 有了、那花梢曉露、最是清潔、用他調丹濡粉、鮮秀非常。(桃花扇・第182段)
- ④⑪ 王述云：「婚是嘉禮。春秋傳曰：『娶者大吉、非常吉。』」(新校本晋書・第668段)
- ④⑫ いつになく富士見町の方へは足が向かないで土手三番町の方へ我れ知らず出てしまった。ちょうどその晩は少し曇って、から風が御濠の向うから吹き付ける、非常に寒い。(吾輩は猫である・夏目漱石)
- ④⑬ 主人は無言のまま吾輩の頭を撫でる。この時のみは非常に丁寧な撫で方であった。(吾輩は猫である・夏目漱石)

例④⑩の「非常」は文中の形容詞の後に位置しても、やはり例④⑪の「非常」と同じ、副詞として一般的ではないという意味を表し、例④⑫④⑬の漢語副詞の意味用法と同じである。

以上の用例を見て、この類のものは、古代漢語においても、日本語においても品詞から意味まで一致していることが分かる。

## 2 古代漢語と意味的に相違するもの：

古代漢語と意味的に相違する日本語の漢語副詞は次のようなものがある。

一緒に	一体に	気根に	仰に	是非に	馬鹿に	必死に
変に	無下に	無性に	無理に	優に	楽に	陸・碌に
因果と	打・丁と	役と	結局で	天から	天道ぞ	是非とも

次第次第に

次にその具体的な用例を対照的に見てみよう。

## 1) 「必死」

④④ 企生揮涙曰：「今日之事、我必死之。汝等奉養不失子道、一門之中有忠與孝、亦復何恨！」  
(新校本三国志・第2322段)

④⑤ 整罵曰：『死狗、此何言也！我當必死為魏國鬼、不苟求活、逐汝去也。欲殺我者、便速殺之。』(新校本三国志・第127段)

④⑥ 留学生 アンケート！ぼくらはみんな必死に生きている！-次回のテーマは... 『悲しいほどヘタな嘘』 おやおや、もう来月号は4月号ですよ。

([http://www.lovest-la.com/love\\_live/ikiteru67.html](http://www.lovest-la.com/love_live/ikiteru67.html)-10kによる。2005年9月15日取得)

④⑦ ... 兄弟の絆は強かったのか?私には、兄だけが必死にそれを守ろうとしていたように感じた。

...

([http://blog.with2.net/find\\_item.php?key=%C9%AC%BB%E0-22k](http://blog.with2.net/find_item.php?key=%C9%AC%BB%E0-22k)による。2005年9月15日取得)

上の例④④の「必死」は漢語において「必ず」と「死ぬ」との二語になって、「必ず死ぬ」という意味である。しかし、例④⑥④⑦の漢語副詞の「必死に」は日本語において、全力を尽くしてするという意味に用いられているので、漢語のそれと品詞上でも意味上でも違っている。

## 2) 「無理」

④⑧ 咸陽縣尉袁儼與軍鎮相競、軍人無理、遂肆侵誣、儼反受罰。(新校本旧唐書・第4089段)

④⑨ 懿大怒曰：「公孫淵何不自來？殊為無理！」(三国演義・第675段)

⑤⑩ 強勢は権利なりとの格言さえあるこの浮世に存在する以上は、いかにこっちに道理があっても猫の議論は通らない。無理に通そうとすると車屋の黒のごとく不意に肴屋の天秤棒を喰う恐れがある。(我輩は猫である・夏目漱石)

⑤⑪ 「ほかにもだんだん口が有るんですから、無理に貰っていただかないだって困りゃしません」  
(我輩は猫である・夏目漱石)

例④⑧④⑨の「無理」は漢文では「無」と「理」の二語になって、理にかなわない、道理がないという意味に使われている。しかし、例⑤⑩⑤⑪の「無理に」は漢語副詞として日本語において強いて行うという意味に使われ、両者はやはり品詞上にも意味上にも違っている。

## 3) 「是非」

⑤⑫ 這個劉恭、素性原是個歪人、又特有三個惡子、硬的怕、軟的欺、富的嫉忌、貧的嘲笑、嘴尖舌薄、談論人的是非、數說人的家務；造言生事、眼內無人、手段又甚是不濟。(醒世姻緣・第643段)

⑤⑬ 咱們盡了為父母的心、不曾落後、你這小孩兒、若成人時、三條路兒中間裏行著、別人東西休愛、別人折針也休拿、別人是非休說、若依著這般用心行時、不揀幾時、成得人、(老乞大諺解・第205段)

⑤④ その人が、自分のことを、何う云つたかは、瑠璃子に取つては是非にも訊きたい大事な事だつた。(真珠夫人・菊池寛)

⑤⑤ 女中も主人の身を案ずるやうにさう云つた。が、瑠璃子は是非にも帰つて貰ひたいと思つた。(真珠夫人・菊池寛)

上の例⑤④⑤⑤の「是非」は漢語においては名詞で、是と非の意味であるが、例⑤④⑤⑤の「是非に」は漢語副詞として、「是であろうと非であろうと、それにもかかわらず」という表現から生まれ、「きつと」、「必ず」という意味を表しているのが、当然漢語の「是非」と意味にも用法にも違っている。

#### 4) 「馬鹿」

⑤⑥ 彼趙高、刑餘之人、傳之以殘忍戕賊之術、日恣睢、天下之人未 盡愚、而亥不能分馬鹿矣；高之威懾天下、而亥自幽深宮矣。(新校本新唐書・第5224段)

⑤⑦ 二十五年、閩浙總督愛必達奏言：「安南邊境沙匪與交目蘇由為難、闖入漫卓、馬鹿二寨、搶掠滋事、已咨其國王擒解矣。」(新校本清史稿・第14633段)

⑤⑧ 信一郎の乗つてゐる自動車の運転手は、此の時代遅れの交通機関を見ると、丁度お伽噺の中で、亀に対した兎のやうに、いかにも相手を馬鹿にし切つたやうな態度を示した。(真珠夫人・菊池寛)

⑤⑨ 「貴女は、俺を飽くまでも、馬鹿にしてをられるのがや。貴女は人間としての俺を信用してをられんのがや。(真珠夫人・菊池寛)

例⑤⑥の「馬鹿」は漢語において名詞で馬と鹿の意味で、動物の名前として使われている。⑤⑦の「馬鹿」は地名である。例⑤⑧⑤⑨の「馬鹿に」は日本語の漢語副詞としても、梵語からの訳語であるため、古代漢語のそれと語源違って、品詞にも意味にも違っている。

#### 5) 「変」

⑥⑩ 太祖■曰：「怒不變容、喜不失節、故是最為難。」(新校本三国志・第156段)

⑥⑪ 建安二十四年、孫權攻合肥、是時諸州皆屯戍。恢謂兗州刺史裴潛曰：「此■雖有賊、不足憂。而畏征南方有變。」(新校本三国志・第479段)

⑥⑫ 「私も変に思いましたからね、鼠かなんかの故じゃないかと思って、婆やと二人で仏さまの下まですっかり調べて見たんですけど.....何物も出て来やしません.....」(新生・島崎藤村)

⑥⑬ そこへ豊世を連れて行くと、向島も来て変に思ったと見えて、容易に顔を出しませんでした。(家下巻・島崎藤村)

例⑥⑩の「變」は漢語では動詞で、「変わる」、「変化」の意味であり、例⑥⑪の「變」は「事変」という意味で、動詞として使われている。しかし、例⑥⑫⑥⑬の例の「変に」は漢語副詞として、不思議という意味に使われているので、漢語の意味用法と違っている。

## 6) 「楽」

- ⑥④ 是時新募民開屯田、民不樂、多逃亡。渙白太祖曰：「夫民安土重遷、不可卒變、易以順行、難以逆動、宜順其意、樂之者乃取、不欲者勿彊。」(新校本三国志・第334段)
- ⑥⑤ 莊入為壽。壽畢、曰：「軍中無以為樂、請以劍舞。」因拔劍舞。項伯亦起舞、常以身翼蔽沛公。(新校本漢書・第26段)
- ⑥⑥ 「あの時分から見ると、余程これでも楽に成った方だよ。もう少しの辛抱だろうと思うね」(新生・島崎藤村)
- ⑥⑦ その時、そう思った。こんなに気が楽になるものなら、何故もっと早く谷中の方へ節子を見に来なかったらうと。(新生・島崎藤村)

例⑥④の「楽」は漢文において動詞で、「喜ぶ」の意味であり、例⑥⑤の「楽」は「楽しむ」という意味に使われているが、例⑥⑥⑦の漢語副詞の例では「楽に」は簡単容易なものにするという意味に使われ、漢語の意味を伸ばしたのではないかと考えられる。

本来、漢語副詞は漢語から受容され、元の意味でそのまま用いられる語が多いが、上に挙げた語のように、語源になる漢語と意味、用法上ではかなり相違する語が多く存在していることが分かる。

簡単ながら、全部ではなく、いくつかの語例を対象に分析してみた。それで分かるように、漢語と意味用法が同じ或いは近似している漢語副詞は大体漢語の副詞または形容詞から受容されたもので、意味の相違が大きいものは大体漢語の名詞、動詞、またはフレーズから受容されたものだと分かる。しかし、なぜ漢語の名詞、動詞、またはフレーズから受容したものは意味用法に相違が大きく、またはどういう過程でどう変わったかは非常に面白い問題で、今後の課題として続けて研究したい。

## 四、語尾「に」、「と」などにもたらした表現上の相違

記述した調査で分かるように、漢語副詞は単語によって違った語尾を持っている。その語尾の違いによって、表現上ではどういう違いが生じるのであろうかは、本稿の探究したい内容である。

## 1 「に」の付くもの

## A、「に」語尾だけを持つもの

暗に	一時に	一度に	一気に	一体に	万一到
一緒に	一斉に	一概に	一に	陰に	有無に
気根に	仰に	現に	蔽に	絶対に	直に
次第次第に	次第に	順に	真に	切に	相応に
俗に	単に	特に	頓に	如実に	必死に

不意に            本・真に            無下に            無性に            面々に            猛に  
 朦朧に            優に                陸・碌に

その用例を見てみよう。

- ⑥⑧ それ<sup>⑥</sup>が運がわりいといへばわりいのだらうが、たとへそれがひとつになつても、運が好いかわりいかわからない.....。こいつは何うも一概には言へないな。——昨夜話してゐる中にこんな言葉が雑つてゐた。(道綱の母・田山花袋)
- ⑥⑨ 後ろから不意に小供に飛びつく事、——これはすこぶる興味のある運動の一だが滅多にやるとひどい目に逢うから、高々月に三度くらいしか試みない。(我輩は猫である・夏目漱石)
- ⑦⑩ 俺は、俺を呼び止めたのが甲吉だと知ると、思い切り詰らなそうな顔をして見せた。「お前と一緒に歩くのは厭だよ」と云わぬばかりに。(今度こそ・片岡鉄兵)
- ⑦⑪ しかし、その、人間にかえる数時間も、日を経るに従つて次第に短くなって行く。(山月記・中島敦)
- ⑦⑫ こんな寒い晩に登つたのは始めてなんだから、岩の上へ坐つて少し落ち着くと、あたりの淋しさが次第次第に腹の底へ沁み渡る。(我輩は猫である・夏目漱石)
- ⑦⑬ 私の逃出したのが矢張それだ。女を知らぬ前と知つた後との分界線を俗に皮切りという。私は性慾に駆られて此線の手前迄来て、これさえ越えれば望む所の性慾の満足を得られると思ひながら、此線が怖ろしくて越えられなかったのだ。(平凡・二葉亭四迷)
- ⑦⑭ 二十貫は優に越えている堂々たる体格である。(井上靖・氷壁)

上の「に」語尾を持つ用例では、例⑥⑧の「一概に」、⑥⑨の「不意に」は古代漢語と一致している。例⑦⑩の「一緒に」と⑦⑪の「次第に」は漢文では名詞であるが、日本語においては副詞として使われている。これはその「に」によるものではなからうかと思われる。確かに例文を読んで感じたことであるが、「一緒に」は連用修飾語になると、本来「一緒に」の名詞としての「同じようなもの」の意味がなくなり、代わつて「異なつたものが同時に同じ動作行為を行う」という意味合いになつたのである。例⑦⑪の「次第」も本来は一つ順序を表現する名詞であるが、その後「に」をつけて、日本語の漢語副詞として使われると、順序そのものではなく「順次」「段々」「徐々に」のような状態を表現することになつたのである。例⑦⑬の「俗」と⑦⑭の「優」は古代漢語においては形容詞で、「俗っぽい」、「優秀、優れる」のような意味を表現するが、日本語の漢語副詞だと、その後「に」がつけられる。すると、連用修飾語になり、「俗っぽい」というものの様子ではなく、「通俗的に」というような動作行為の状態を表現することになる。同じように「優に」も、「優秀、優れる」のようなものの性格、特徴ではなく、「たっぷり、博く、余裕がある」というような動作行為を行う状態を表現することになる。その意味で、「に」をつけて出来た漢語副詞はものの様子、性格、特徴などより動作行為を行うその状態を描くことになるのである。これは「に」の主な役割ではないかと筆者は思う。

## B、「に、な」の語尾を持つもの

非常に 楽に 急に 馬鹿に 変に 妙に 無理に

その用例は次のようなものがある

- ⑦⑤ 「でも、病院へ通うように成ってから、お前も余程楽になったろう——」と復た岸本はいたわるように言って見た。(新生・島崎藤村)
- ⑦⑥ 私がここで言っている楽な活動とは、自分の心に正直な活動を行って、精神的に楽な状態を保つことの出来る活動ということ... (www.sidebz.com/html/8.html-9k-による。2005年9月15日取得)
- ⑦⑦ あとは、夜になるのを待つばかりだが——面倒臭いからぐうっと時計の針を廻して、無理にももう夜になったことにする。(踊る地平線・谷譲次)
- ⑦⑧ ローゼンベルクの芸術論は、最近の独逸主義実行の必要上、随分一方的で無理な点があるけれども、時々には有益なことをいつてゐる。(双葉山・斉藤茂吉)
- ⑦⑨ だから、そんな馬鹿には生きてる権利もない、どんなに虐殺しても構わない——と言ったような、自分でも不思議な、まあ一種の制裁的痛快感に、思わず拍手しちまうといってる。(踊る地平線・谷譲次)
- ⑦⑩ ある日、この馬鹿な亭主に女房が「明日はあたしのお父さんの誕生日で、あたしは先に行って手伝いをするからから、お前さんは明日あたしの実家にきておくれ」と言いました。(馬鹿な亭主・姜淑珍故事選 (homepage1.nifty.com/kotobatokatatchi/sub57.htm-6k-による。2005年9月15日取得)

上の「に、な」語尾を持つ用例では、例⑦⑤の「楽に」は連用修飾語として動詞を修飾するのに対し、例⑦⑥の「楽な」は連体修飾語として主に名詞を修飾する。例⑦⑦の「無理に」と例⑦⑧の「無理な」も同じ意味に使われているが、ただ修飾上では違っているといってもいいであろう。例⑦⑨の「馬鹿に」と例⑦⑩「馬鹿な」は梵語からの訳語で、用法上の違いは上の例と同じで、ただ修飾上での違いである。「に、な」語尾を持つ語は、文中では「に」語尾なら、連用修飾語として副詞の機能を果たしているのに対して、「な」語尾なら連体修飾語として形容動詞の機能を果たしているので、日本語の文法規制による変化というよりは、日本語文法の決まりそのものだといいようがよい。従って殆どの辞書ではこの「に、な」語尾を持つ語を形容動詞としているのである。筆者も同感で、形容動詞として扱えるものをわざわざ二つの語尾を持っている漢語副詞に分類しなくてもよいのではないかと思う。その意味で、「現行辞書における副詞一覧」に訂正を加えた方がよいと勧めたい。

## C、「に、は」の語尾を持つもの

実に 実は

- ⑧⑪ 後で考えれば不思議だったが、その時、袁彦は、この超自然の怪異を、実に素直に受容れて、少しも怪もうとしなかった。(山月記・中島敦)

㉔ 「実は先生に御継り申して、誰も知ってるものがないのに出て参りましたのですから、大層失望しましたのですけれど、」(蒲団・田山花袋)

例㉓の「実に」は「素直に受容れて」に作用して、その真実さを強調して言い表しているのに対し、例㉔の「実は」は下の文全体に作用して、その真実さを強調して言い表している。この違いはまさに助詞「に」の働きと係助詞「は」の働きとの違いである。つまり係助詞「は」は「に」を代用するだけなので、この「実は」を副詞としないほうがむしろすっきりになるかも知れない。

#### D 「に、とも」の語尾を持つもの

是非に 是非とも

㉕ 是非にも婿を取らば、おかちが命は有るまいぞ(浄瑠璃・油地獄)

㉖ この多賀の府からは歌枕の千松島はもはやさして遠くない。今までは用事が忙しいので行つて見ることが出来ずにあるが、秋にもなつたら、是非とも暇をこしらへて行つて見るつもりだ……などとも書いてある。(道綱の母・田山花袋)

色々調査してみたが、例㉕の「是非に」の用例は非常に少なかったのである。これに対して、例㉖の「是非とも」は「どうしても」「如何にも」という意味で、よく使われるようである。実際に現在の話し言葉ではむしろ裸の「是非」が一般的になっている。

## 2、「と」の付くもの

#### A 「と」語尾だけを持つもの

因果と 時節と 颯と 打・丁と 篤と 茫と 万と 役と 凜と 麗麗と  
歴と

㉗ しかし是は自惚れから出た暴擧と取れないこともない。何となれば彼は自然を互性とのみ取り、因果と取ることを知らない。(安藤昌益・狩野亨吉)

㉘ 自分はもう何千枚書いているか知らない。自分で考えただけでも茫とする。(詩、詩歌の城・室生犀星)

㉙ 只麗麗と蕎麦の名前をかいて張り付けたねだん付け丈は全く新しい。(坊っちゃん・夏目漱石)

㉚ 灰色の雪のある所から、ない処へ日が黄いろい、寂しい温かみのある光が颯と差して来た。(青年・森鷗外)

㉛ 骨を切る音が鈍く響いて、横に薙いだ太刀の光が、うすやみをやぶってきりりとする。——と、その太刀が宙におどって、もう一人の侍の太刀を、ちょうど(丁と)下から払ったと見る間に、相手は肘をしたたか切られて、やにわに元来たほうへ、敗走した。(偷盗・芥川龍之介)

上の例を分析してみると、「と」をつけて出来た漢語副詞の特徴は次の三点あると思う。

1) 「因果と」の用例のように、「因果として」の意味で、連用修飾語として副詞のような

形式になるが、実際には、やはり本来の名詞そのものである。

- 2) 「麗麗と」「颯と」の用例は、みな擬態語または擬声語のようなもので、実際に行う動作行為の状態というより、その動作行為の見られるまたは聞こえるような外観的な様子を表現するものである。
- 3) 具体的な用例はまだ見つからないが、数字の「万」などの利用より推測すれば副詞として動作行為の様子、状態（「に」の場合）と違ってその動作行為の程度を表現するのではないかと思った。

#### B 「と」「ながら」の語尾を持つもの

自分と          自分ながら

- ⑩ 唯一人杉山ばかり自分と一緒に其志を固く執つて、翌年の四月陸軍幼年学校の試験に応じたが自分は体格で不合格、杉山は亦学科で失敗して、それからといふものは自分等の間にもいつか交通が疎くなり、遂には全く手紙の交際になつて了つた。(重右衛門の最後・田山花袋)
- ⑪ 葉子はふと心に浮かんだその対比を自分ながらおもしろいと思った。そんな余裕を葉子は失わないうでいた。(或る女・有島武郎)

上の例⑩の「自分と」は或る行動の同伴を表して、例⑪の「自分ながら」はある行動をするときの状態を表している。「自分と」と「自分ながら」は一応「現行辞書における副詞一覧」にあるものの、語尾としての「と」と「ながら」はいろいろの語について自由に使われるので、私見としては、この自分を名詞として、「と」を格助詞に、「ながら」を接続助詞としたほうがよいのではないかと思う。

#### 3 他の語尾を持つもの

結局で          毫も          心から          真・神ぞ          例の          卒爾ながら          天道ぞ  
天から          道理で          微塵も

- ⑫ 卒爾ながら、少々物を訊ぬるが、(恩讐の彼方へ・菊池寛)
- ⑬ 悲しいことも何にも無い、結局で浮世が面白いと笑うて見せて力を付け(浄瑠璃・淀鯉)
- ⑭ 「道理でさっき私がこの事をいいかけるとあの方(かた)が目で留めたんですよ。やはり先方(あちら)でもあなたに知らせまいとして。いじらしいじゃありませんか」そういう女将の声もした。(或る女・有島武郎)
- ⑮ 微塵も化粧もせず、白粉のかわりに、健康が**ぶんぶん** 清潔さであなたが僕を惹きつけた。(田中英光・オリンポスの果実)
- ⑯ 吾輩は画かきを廃して、辻に出てかな**ぶんぶん**の車を曳く奴を、子供に売って遣ろうかと思っている」こう云って、独りで笑った。例の嘶(いなな)くように。(青年・森鷗外)
- 上の例⑯の「卒爾ながら」は古い言い方でありながら、品詞上でも意味上でも古代漢語

と同じである。例<sup>93</sup>の「結句で」は漢語副詞では「却って」という意味で用いられるが、漢語と品詞上でも、意味上でも違っている。例<sup>94</sup>の「道理で」も、例<sup>95</sup>の「微塵も」も漢語と品詞上でも、意味上でも違っている。例<sup>96</sup>の「例の」は本来の名詞「例」に格助詞「の」が来て、一緒に連体修飾語になっているのであり、漢語副詞との認識は間違っているのではないかと思う。というようなことで、漢語副詞になる語の複雑さが分かるだろう。

大雑把ではあるが、以上の用例分析から見れば、漢語副詞に「に」をつけるか、それとも「と」をつけるかは、漢語副詞それぞれの言葉によるもので、勝手につけるようなものではない。と同時に、「に」をつけられるものには、「と」はつけられないし、「と」のつけられるものは、「に」に取り替えることも不可能である。現実的に、「に」「と」両方つけられるような漢語副詞はまだ一つも見つかっていないのである。しかしながら、「に」の付く漢語副詞は、ものの様子、性格、特徴などより動作行為を行う時のその状態を表現するのに対して、「と」の付く漢語副詞は実際に行う動作行為の状態というより、その動作行為の見られるまたは聞こえるような外観的な様子を表現するか、またはその動作行為の程度を表現するのである。つまり、「に」と「と」のどちらをつけるかは、その漢語副詞の表義性を離れて考えてはいけないうことであろう。具体的にいえば、動作行為を行う時のその状態を表現する漢語副詞には「に」をつけ、その動作行為の見られるまたは聞こえるような外観的な様子、あるいはその動作行為の程度を表現する漢語副詞には「と」をつけることになる。

#### 四 結び

以上で漢語副詞の語源、意味、特に語尾を中心に観察してきたが、日本語の漢語副詞の語彙数が多く、その語源も複雑であることはよく分かった。しかし、古代漢語から受容された漢語副詞に語尾をつけることによって、さまざまな微妙で且つ細かい副詞としての表現が出来るようになったのは事実である。それによって日本語の表現力を大いにアップしたことも否定できないものである。従って、この漢語副詞に「に」また「と」などの語尾をつけることは外来文化を受け入れる日本人の知恵が物語られていると思う。特に「に」と「と」との厳格な使い分けを見ると、更にそれを実感する。ただし、その漢語副詞使用の歴史があまりにも長いし、その量も多すぎるため、筆者としては浅い分析しか出来ず、今後この課題をもっと深く掘り下げていこうと思う。

#### 注釈

ここで言う漢語副詞は古代漢語から日本語に入った副詞のことを指す。

「現行辞書における副詞一覧」 竹内美智子など 鈴木一彦・林巨樹編『日本語文法講座』5  
明治書院 1973年5月20日

漢語が日本語に入って、そのまま副詞として使われるものをさす。

日本語の副詞一部と助詞の一部に相当するもの

本稿の中国語の用例は台湾の中央研究院の漢籍電子文献 (<http://www.sinica.edu.tw/ftms-bin/ftmsw3>) より検索して引用したものである。以下同様。

作者と作品が明記されている日本語の用例は『青空文庫』(<http://www.aozora.gr.jp/>) より検索して引用したものであり、ネット上からの用例であるため、ページ番号が本来なかったので、本稿中でも付けないことにした。以下同様。他の用例は文中においてその都度、出典サイドのアドレスを明記しておくことにする。

#### 参考文献

- 1 渡辺実 『副用語の研究』 明治書院 1983年10月20日
- 2 鈴木一彦・林巨樹 品詞別『日本語文法講座』5 明治書院 1973年5月20日
- 3 何楽士・敖鏡浩・王克仲・麦梅翹・王海葵『古代漢語虚詞通釈』北京出版社 1985年5月
- 4 罗竹风『漢語大詞典』漢語大詞典出版社 1994年6月
- 5 諸橋轍次 『大漢和辞典』大修館書店 1971年5月1日
- 6 辞海編輯委員会『辞海』中華書局香港分局 1979年2月
- 7 新村出 『広辞苑』5版 岩波書店 1998年10月
- 8 松村明『大辞林』2版 三省堂 1995年11月3日
- 9 金田一春彦 『学研国語大辞典』学習研究社 1981年2月1日